

大学放浪記 (10)

伊藤信孝

マエジョ大学客員教授・再生可能エネルギー学部

本報では、前報からの「講義分担」の続報について記す。タイでは外国人教師が講義を担当する場合は、必ず分担するパートナーが用意され、共同で一つの講義を分担する決まりになって居る。言うまでも無く公式にはそうした規則になって居る。このことは前報においても記したが、パートナーとの間に意思の疎通も無ければそのパートナーすら面識もないと言う間柄のもとで、講義内容についての種々の情報すなわち

1) 授業回数、2) 履修申告で登録した受講学生の人数や氏名、3) 学部生か院生かの別、4) 院生の場合、修士課程か博士課程か、できれば何年生か、5) 所属先(学科、研究室)、6) 授業実施の曜日と時間(何時から何時まで)の情報が予めもたらされるのが一般的で有り、常識でもある。上記の情報の一切が知らされず、来週の何曜日に MS Teams にアクセスして授業をやってくれというのは、極めて非常識でもあるし、失礼でもある。また、国際的なエチケットからも外れている。授業の他に実習的な内容のものが記載されており、自宅での自習も含まれている。コロナ禍でオンラインでの授業というのに、実習とは何をするのかと言う説明もない。意地汚く考えれば、大げさに記述して、脅かすと言う意図もあるのではないかとさえ勘ぐりたくなる。いやしくも大学の教員として責任を持って負担する立場にある者の取るべき行動ではない。筆者は2ヶ月も前に上記の項目について、共同分担者と教務担当の事務スタッフに申し入れたが、返事は曖昧で、カウンタ・パートと言う相手からは、今夜シラバスを送る等と言っていたが、未だに届いていない。問いただすと、新しい講義科目であるからとの言い訳であったが、それなら一層、直接会って話し合い、講義内容について調整をするのがまともな対応ではないか。残念ながらこうした振る舞いをする大学教員が未だに教員としてその座に座っていることに、いや座って居られることに疑問すら持っている。また教務担当のスタッフに連絡を取り、直接会って話をする機会を作って貰うよう申し入れたが、直接の返事はなく、上記のような1) から6) に関する情報もなく、「来週の何曜日に MS Teams にアクセスして授業をやってくれ」と言う返事がきた。忍耐強く、少くらの失礼な振る舞いには怒りを抑える様に心掛けて居る筆者も、流石にこのメールによる、しかも講義分担者であるパートナー自身ではなくスタッフからの間接的メールに堪忍袋の緒が切れて、副学長に、今自分に起きているありのままを書いて報告した。もちろん副学長のみならず、主任や関係のスタッフ、さらには学長にさえもである。指示された講義の実施までには1週間を切っている。何を話すかは講義の名称からあらかじめ自らが認識して居る内容の講義資料をPPTで用意し、「とにかくやるしかない」と言う覚悟で臨むことにした。問題はうまく授業が進行できるか、英語での講義については問題は無いが、問題はオンラインを通じての通信がうまくつながるかどうか、

また、順調に授業が進行していても何某かの原因で急に通信が切れたらどうするか、また履修学生がどの程度の英語理解力を有するのか、などいくつかの案件が浮かび上がってきた。副学長に仕える主任に相談した結果、博士課程の学生1名を授業時間中かたわらに待機させ、予期せぬ出来事に対応できる体制を敷いてくれたことである。MS Teams はこれまでも参加した経験はあるが、自らは招待される形での参加で有り、実質取り扱いについては皆無であった。その意味では博士課程の学生派遣と待機は最良の対応であった。講義を始める時間がきて、円滑に授業を始めることができた、また、聴講する側からの質問や注文などにタイ語で交信できるアシスタントとしても大変有り難かった。同じような事は他大学でも経験し、その時も英語の話せるスタッフが同席し、必要に応じて所要の対応をしてくれたことを考えると、その対応の差に驚きである。そうした行動をする教員やスタッフに文句を言うつもりはないが、その行動や振る舞いが余りにも違いすぎるのが、大学の評価、ランキング向上に障碍になっていることを誰も気にしていないのではないかと思うと寂しい。ここまでは前報と重複する部分もあるトピックの内容の流れを理解して頂く為に敢えて記した。

さて授業であるが、当初いくらかの不安があったが、事ここに至ってはやるしかない。恐れや怯える必要はこれまでの長い経験から、さらさらない。むしろ堂々としてやってのける自信もあった。アシスタントの博士課程の学生の「始めて下さい」と言う合図の言葉に授業を始めた。しばらくして聴講者側に居る教員（主任）から質問が出たが声が小さく聞こえるだけで意味を理解できる音量ではなかったことがわかった。アシスタント役の学生がタイ語で聞き返し助けてくれる。そこで、聴いてみたらPPT画像が画面に映っていないと言うことらしい。早速この事への対応を学生がやってくれる。元に復帰して授業に戻る。残念だったのは話している筆者の顔も聴講者の誰の顔もスクリーンには映っていないことである。これでは教育テレビと同じで、聴講者の反応を見ることもできない。相手側に筆者の顔が映し出されていたかどうかは定かではないが、できるだけ双方向（インタラクティブ）な環境下での授業がその効果さえも左右すると考えて居る。後で調べたら筆者の顔は学生には見えていたらしい。その効果とは相互に知り合い、相手を知ることで親しみや信頼感、友好的雰囲気、気楽にコミュニケーション出来る間柄、を醸成できる事を意味する。オンラインでは顔を見せずに名前だけを映しておいて、本人は中座していることも可能であるし、中座の合間に間食したりすることもできる。極端な場合、授業時間中「その場に居なくても良いことになる。今でなくまた時間のあるときにビデオを見直せば良いと安易に考える学生が居てもおかしくはない。しかし、それならそれで後で確実にビデオを見て勉強するならともかく、そのまま勉強をしないのではオンライン講義の意味がないし、講義を聴講するモチベーションが余りにも低すぎるという判断、評価になる。筆者は一方通行のオンラインではなく、それをインタラクティブ (interactive) にすべく、必ずフォローアップすべく質問状やアンケート用紙を配布し、反応を確かめるようにしてきた。そうした対応により、授業進行のまずさ、内容の充実、聴講者の満足度などをフィ

一バックしてもらい、より良い授業にする努力が必要と考えて居る。次回にはそうした用紙を準備、配布し授業に対する感想も含めた満足度を聞いてみたいと思っている。教える側からの一方通行の話では、まさに教育テレビと変わりはない。また、自己の授業内容についても、ひょっとしたら受講者は既に知っているかも知れない、と言う懸念もある。オンラインであるからこそ余計にそうした対応、フォローアップに注意を注ぐべきである。どれほどの教員がそうした事への対応に注意を払っているかは知るよしもないが、筆者は重要な事と認識して居る。当初午前8時から11時までの3時間という話であったが、12時までの4時間に為ってくれとの再要請も有り、12時までと成った。休憩時間は取らず、ぶつちぎりの4時間、英語での講義でスライド75枚を消化した。他の知人から聞いている話では、大学院課程の学生といえど英語の理解力は低く、特に話し言葉については極めて理解できないレベルと思うので、ゆっくり、しかも何度も繰り返し話すべく心がけるよう助言を頂いた。なるべくそのアドバイスに従った形で授業を終えたが、所要時間とスライドの枚数から判断するとほぼ助言に沿った対応に見えるが、中身の内容をどれほど受講者側が理解したかはフォローアップで確認する必要がある。別の大学での学部全学生を対象に行った講義では、スタッフも参加し、アシスタントと通訳（簡単な打ち合わせと連絡）を兼ねた役割を果たしてくれた。したがってこうした形が望ましいし、この種のオンラインでの講義ではスタンダードと考えて来た。

また授業展開に於ける筆者の思いは、如何に自分が最近の情報機器の操作、取り扱いに無知であるかと言う悲惨な反省である。年を老う毎に挑戦する気力以上に逃避感が先に立ち、あきらめにも似た行動が自ずと前が出る。これではいけないと分かっている、恥ずかしさもあって聞くことに躊躇する。聞く相手がスタッフや教員であると余程知り合った間柄で無い限り、聞くことを躊躇する。そう言うことから見ると学生のアシスタントというのは気軽に聞けるし、恥ずかしさも半減する。学生もコミュニケーションの能力が向上する。筆者も臨んで居たことで有り、最良の対応と内心喜んで授業ができた。いくら授業の内容が質量ともに優れていても、授業が理解されていないのでは意味がない。これこそ授業以前の問題で有る。いくら逃避しても最後には自分に戻ってくる事への認識が未だ足りないことを再認識した次第である。直接顔を合わせて、会いもせず、打ち合わせもなく、情報も全く流さない講義の分担者たるパートナーが、どの様な授業を普段展開して居るか興味のある所である。なぜならこの振る舞いを見て、大学の正常な授業の形にはとても考えられないからであり、その授業を履修した学生達が如何に幸せなのか、はたまた、その逆で不幸なのか見てみたい物である。しかしこれまで見てきたいくつかの授業体験から判断するに、オリジナルな成果が少ないのもその要因の一つかとも考える。

さてこのように書いてきたが、少なくとも大学教育と言うことであるなら、授業分担を担うパートナーのこのような扱いは余りにもおかしいのではないか。いやしくも将来の人材育成と言う義務と責任を感じて真剣に対応すべきではないか。少なくとも筆者はその様に考えるので、当初に授業の名称を聞いたときは大いに興奮し、期待を膨らませていたが、

今は残念ながらがっかりしている。筆者のこの書面が貴方の気分を悪くする様であればご容赦下さい、と綴った。そして戻ってきた回答はどうであったか、と言うと1週間に一回、4時間の講義を2回やってくれと言うことであった。それ以外は聞いていないので1つの科目を前半と後半に分けて分担すると言う話ではなかったのかと尋ねると、いや今回は2回で良い。その代わり別のトピックで話をしてくれと言う。これが対応の典型的な例である。いくら意見を言っても、聞き入れられることはない。文句があればやめれば良い、もっと言うならば、被雇用人が雇用人に何を言うか、と言わんばかりの対応である。悪い組織の典型は周りにイエスマンしか集まらない（残らない）と言うが、よく似ている。となると初めからその授業が本当に重要で必要という判断に基づいてカリキュラムに組み込まれて居たかどうかとも怪しくなる。意見を言い、気に入らないことごとく「それなら」と言う事で意見を言った者を「その任から外す」のが共通した何処の大学でも見られる対応と考えて居る。「言い出しつpegが損をするのなら、言わずに黙って居よう」と言う者が増えて残りはイエスマンばかりとなるというわけで有る。投資を促されても投資意欲をなくす様な対応ではいつまで経っても投資は成されないのと同じで、このあたりが大学の進展を阻んでいるのではと考えている。前もって十分な準備をして本番に臨むべく、考えて居ても講義分担者とのつまらぬ問題などが障碍となって、本来協力すべきところが反って関係を悪化させる結果を招く。かと言って余りにも目に余る態度や挙動に意見を言うこともできないのでは組織が良くなる道はない。まあこの程度の大学かと言う諦めに辿り着くのも理解できる。だから急に予定が変わって、別のことをやれと言われる事が多い。十分な準備もせず間に合わせ的な対応では満足できない者（と言っても十分な準備を為て事に当たるのが一般的と考える）に取っては居心地の悪い組織である。在職時代にも類似の事を経験したが、依頼されて手を挙げたが、履修学生の人数、名簿、教室の手配など、全て手を挙げた者がやるというのでは、関係者は要らない。余程公務員（あるいは公務員に準ずる教職員の多く）が仕事を為たくないと言う気持ちを持って居るかを推し量る事が出来る。ひとつぐらいはより革新的な組織作りに取り組んでいる大学があってもと考えて来た筆者に取って思わず出てきた言葉が「ブルータスお前もか」である。これまで見てきた大学の中にも、大学を良くしようと言う気構えで一杯の人が無かったわけではない。しかしそうした人は残念ながら学長などの要職には選ばれない。私欲と保身に優れた人ばかりが何故か要職についている。何時になれば本物の大学人が出てくるのであろうか。さらに思い出した事が出てきたので、敢えてさらに追記する。1回目の4時間ぶっちぎりの講義を終え、第2回目の講義の準備をするべく、作業を続けていたが、第1回目の講義で配布した資料を半分ほど残して第1回目を終えたので、ひょっとしてその残りの部分を時間の関係で早めに終わったときの対応を考えておく事の必要性を感じた。そこで第1回目の講義に関する学生達からの反応、筆者の講義に対する印象、よかったところ、悪かったところ、講義に興味を持ったところなどをフィードバックして貰い、次回の講義に反映させる意味でも必要と感じたので、このアンケートレベルの調査資料と万が一時間を待たずに速く終わった場合の余

分な部分をカバーする追加資料として配布を依頼したが、どうも配布されていないようであったので、授業の時に直接追加資料の配付についての趣旨を説明したが、何故すんなりとそうした資料が履修学生に配布され無かったのか疑問である。筆者なりに勝手に考えると、敢えてさらに余分な資料を配布しなくてもと言う、判断が中に入った教員の認識だったのでは・・・といぶかる次第である。何故仲に入った教員がその様な事をするのか極めて残念である。おそらく、2回の講義を終えた後は別のトピックが講義の内容にあるのであるから、「関係ない」と判断したものとする。筆者にとって極めて腹の立つというよりは、その考え方、非積極性に落胆を覚える。このような事をして居るからいつまで経ってもモチベーションの低い学生しか輩出できないのだと今でも思っている。こうした教員の対応がレベルの低い教育を、それで十分だという錯覚を学生に与える。だから独創的な研究も生まれず、何時まで経っても低空飛行で甘んじている姿勢に憤りさえ感じる。まさか筆者の望みが高すぎると言う人は居ないと理解するが・・・ここで敢えて教育に於ける講義に関する対応について筆者の思いを記す。

- 1) オンラインで実施した講義内容は必ず録画し、講義担当した教員に渡すと共に将来的な利用の為に保管しておく。講義実施教員への次回の講義に対する改善に利用できることと、講義担当教員への謝意の表示にもなる。
- 2) 今回だけではなく、これからも次世代に向けて大学での勉強を目指す学生への資料として視聴させる資料として、あるいは類似の目的での使用目的に何度でも利用が可能である。
- 3) 講義を実施したと言うエビデンスにもなるし、同種の講義との比較、今後の改善のための資料用としての利用ができる。

上記の事を要約すると、要するに何かをやれば必ず記録を残し、一過性のイベントで終わらせない心得が必要である。これを支援するのが基本的に事務系スタッフと筆者は理解するが、できなければリサーチ・アシスタントやリサーチアソシエイトの学生でも問題は無い。むしろ積極的に、講義の実施、実施に於ける方法、終わった後の確認、資料の保存と配布、将来的な改善に向けた資料としての利用、また付加的な理由としては大学のランキングアップのためのプロモーションビデオとしての評価資料としての保管と利用、などを念頭に入れての対応が重要である。そうした諸々の項目を考えず、その時限りの事業実施では何時まで経っても、大学は進歩しないどころか、むしろ衰退、凋落へ向かう事が必至となる。